

桂友く作兵衛・タツノの場合

ここは御国を何百里く『戦友』の節にて

- 一 ここは筑豊飯塚の 嘉麻の流れに寄り添うて
小高き丘の奥津城に 作兵衛、タツノは眠れるか
- 二 思えば尊し地の底の 民の暮らしと仕事をば
孫子のために伝えんと 絵筆を取りしは六十路過ぎ
- 三 遠賀の花形川舳 船頭稼業の父さえも
鉄路の前には權を折り ヤマに入るも世の流れ
- 四 暮らしは厳しき中なれど 次々生まれる弟妹に
親を助けて作兵衛の 坑内下がるはまだ七つ
- 五 年の離れた弟の 節句の祝いの武者人形
その美しさ凜々しさに 心を奪わる十二歳
- 六 九尺二間の坑夫納屋 昼なお暗きその中に
金銀赤青身にまとい 清正すつくと立ちており
- 七 心躍りて筆を取り 武將の姿を描き写す
これこそ作兵衛その人に 絵心芽生えし初めなる
- 八 思う存分絵を描けりや さぞやよかろと思えども
親の片腕いとまなく 学校通いもままならず
- 九 わずかに通うた学校の 図画の時間に褒められた
帽子を描いた鉛筆の 絵の一枚を思い出し
- 十 絵筆に心は残れども 残しちゃ食えないヤマ暮らし
カンテラ、ツルハシ、草鞋履き 歩みて下がるはオロシ底
- 一一 耳の遠きはかねてより それゆえ兵役免れて
ひとりの敵も殺めずに すみしは天の計らいか
- 一二 学びの心捨てがたく 疲れた体に鞭打って
借りた字典を書き写す 今宵もともしび細くして
- 一三 せめてなりたやペンキ屋の 看板描きを目指せども
父が病に倒るれば わずか三日で夢破れ
- 一四 幼き弟妹残るなら これが見捨てておかりようか
十と七つで先山に 兄と二人で炭を掘り
- 一五 ヤマを生き抜く智慧と技 ふいごの神に願かけて
鍛冶屋の腕を打ち鍛え 請われてヤマを渡りゆく

- 一六 妻を娶るも呑み過ぎて 叩き出されてまた戻る
一生涯を添おうとは 一升瓶さえつゆ知らず
- 一七 ミセシメ、落盤、ガス非常 命も危ういヤマ仕事
さりとして子らの安らかな 寝顔を見れば明日もまた
- 一八 食うや食わずのヤマ暮らし さりとしてほかに道はなし
炭鉱成金財閥も 炭掘る我らがおらばこそ
- 一九 人繰り、労務に納屋頭 二十重はたえの鎖に縛られて
裸一貫下りゆく 坑夫の心を誰知るや
- 二十 米は値上がり賃金は 雀の涙じゃ生きられぬ
米騒動で捕らわれて 哀れ兄者は牢の中
- 二一 重ねる戦のそのたびに 私腹を肥やせる者あれど
民のかまどの煙絶え 今年も貧乏の花盛り
- 二二 苦楽を共にし妻タツノ 酒好き夫を嘆きつつ
八人子をなし黙々と 一家を支えたかなめ石
- 二三 息子の光ひかるの言うことにや わが家は貧乏金はなし
修学旅行に行かずとも ぼくは平気と健気なる
- 二四 その声聞いたる母親は 軽き財布を振ってみせ
金ならあるよ気にせずに行つておいでと言ひ含め
- 二五 着物を小脇に駆けてゆく 通い慣れたる質屋へと
借りた金子きんすで我が子をば 旅へと出せたが嬉しくて
- 二六 旅から戻りし学校で 我が子の書いたる作文に
母が着物を金に換え ぼくを旅行にやりくれた
- 二七 いつかはぼくが働いて 着物を買つて返さむと
誓いし息子は海軍に 故郷の父母ちちおやまなうらに
- 二八 思えば涙また落つる なぜに光は帰り来ぬ
遙か南の海の底 父母思つて漂うか
- 二九 戦に勝つためもつと掘れ 戦に負けたらさらに出せ
血と汗絞りしその果てに 捨てられようとは思わざる
- 三十 時代に遅れし石炭は 葬り去らんと国策に
次々閉じる坑口は 兵どもが夢の跡
- 三一 ヤマを追われて真夜中に 浮かぶは息子のあの笑顔
淋しき心を埋めようと 墨と筆とを引き寄せて

- 三二 描きも描いたり千枚を 遙かに越ゆる絵の中に
込める思いはただひとつ われらの生きた足跡よ
- 三三 刺青喧嘩にばくち打ち 炭鉱太郎とさげすまれ
されども同じ赤き血の 流るる命に変わりなく
- 三四 草鞋の結び目ひとつとて 描き間違えてはなるものか
なぜならそれは後山の 命に関わることなれば
- 三五 着物の模様もひとりずつ 色柄細かに描き分けて
子どもの遊びも忘れぬ 見つめるまなざしあたたかく
- 三六 絵だけで足らぬと見てとれば 縦横無尽の詞書
坑内唄も書き添えて ヤマのすべてを伝えむと
- 三七 金もいらねば名もいらぬ 喜びくれたら本望と
記憶をたぐりて描き進む その一枚の心意気
- 三八 日記をつけるは若きより 心情出来事みな記し
手帖に満ちる文字たちも その絵のまことを支えおり
- 三九 しみじみ思うこの国は 一流国を名乗れども
変わるは表面うわべのみ 民草報わる日は遠く
- 四十 無学無産といいながら 誰にこの絵が描けようか
黒きダイヤの眩しさは 智慧の光にほかならず
- 四一 酒の神なら松尾様 ヤマの神とて負けはせぬ
ふたりの神に守られて ヤマの終わりも見届けて
- 四二 酒は辛口作兵衛に 小言も辛口妻タツノ
金婚とうに追い越して 歩む月日に果てもなし
- 四三 ワレも余白は少ないと 覚悟の筆の止まる時
連れ添う妻も床につき やがては倒れし夫婦榨
- 四四 天寿全う添い遂げて 二人で歩みしその道の
あとに聳ゆるボタ山は 「世界の記憶」に輝けり
- 四五 ヤマの火すでに消ゆるとも 未来のために残されし
まことの民の宝をば われらも伝えんごしえに